

『囚われた若き僧 峯尾節堂』

2018年04月23日

田中伸尚氏はノンフィクション作家で、天皇制、思想・信教の自由に関する著作を多く著している。天皇制を問う「バンザイ訴訟」にも、毎回裁判を傍聴し、取材をしていた。田中氏が、2月に『囚われた若き僧 峯尾節堂 未決の大逆事件と現代』を上梓している。涙ながらに読んだ。

節堂は臨濟宗妙心寺派の僧侶で、大逆事件に連座し、33歳の若さで獄中病死した。幼い時に、父を失い、寺に預けられ、7歳で得度する。目が弱く、病弱であったため、臨濟宗の厳しい修行に耐えられず挫折するが、勉学に励み、住職となり、熊野の寺を転々と留守居僧を務める。感性豊かな俳句なども詠み、また、多くの人に影響を与えていた『無我の愛』を読んで、「信仰さえ確立せば、パンや、衣服や、住家や、乃至世間の毀誉褒貶やは、どうなっても宜敷きもの歟（か）と存じ候」という心境であった。しかし、貧しい寺暮らし、満たされない心は鬱々と悩み続け、内村鑑三を読み、神学校に行きたいとも言い、芸妓に熱を上げ、母の虎の子を持ち出す放蕩三昧もする。そのような時、社会主義者の大石誠之助らと出会い、また、寺で開かれた幸徳秋水の講演を聞き、自由、平等、博愛の思想に惹かれ、熱心に集会などに参加する。しかし時代は、社会主義者たちへ弾圧を強めていく。15歳の女性と結婚し、新婚2ヶ月後くらいの時、大逆事件に関わったとして警察に連行される。検事から拷問のような取り調べを受け、国が作った筋書きに沿った供述をさせられた。節堂に関する「意見書」は「暴力革命及び大逆罪の計画を開き、之に同意し決死の士たらんことを承諾したり」と書かれていた。

「大逆事件」は、天皇、皇太子を暗殺しようとしたという国家が作った物語によって24人が死刑判決を受け、半数の12人が1週間で処刑され、12人が無期懲役となった事件である。節堂は、これに連座した容疑で東京に護送され、被告とされた人々と共に裁判を受けた。裁判長は「本件は安寧秩序を紊（みだ）す虞（おそれ）あるをもって公開を禁止する」と宣し、傍聴人も新聞記者も追い出し、20日足らずで判決を下した。治安維持法のもとで、思想を犯罪とする「暗黒裁判」であった。

節堂は「初めから主義に対して至誠心は有りませなんだ」と言い、結婚も主義者の言うような自由恋愛でないと、必死に無罪を訴えている。判決は、節堂を含む幸徳秋水、大石正誠之助などに死刑が宣告された。判決を受けた後、「私は今、親鸞聖人を通じて如来の子として頂きました。如来の膝下（しっか）に帰るの信仰をもっております」と葉書を出している。自力本願の臨濟宗から他力本願の浄土信仰に鞍替えした訳である。その後、天皇の恩赦で無期に減刑されたことを知ると、天皇の「聖恩の有難きに感泣し居る次第なり」と言っている。刑務所に勾留されていた時、『我懺悔の一節』を書いているが、尊敬していた大石誠之助や仲間だった人々の悪口を言い続けている。更に「万世一系の尊崇無比なる皇室を奉戴しおれるということを深く感銘して忘れざるようにする事肝要なり」と書き残している。節堂の本心か権力に言わせられたのか分からない。節堂は純真な心で、信じられるものを求道していたに違いない。しかし公権力の圧力を受けた時、高潔さや思想の深さは微塵もなくなった。国の作った犯罪に打ちのめされていく。田中氏は「節堂は何とも語るに難い男である」、だからこそ、「節堂は紛れもなく私」であり、「あなた」と言ってもいい」と書いている。「共謀罪」によって国家権力に追い詰められた時、私は節堂にはならないと誰が言えるのか。田中氏は、権力に翻弄された節堂と彼の家族の悲劇を追うことによって、厳しく現代を問いかけている。